

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第1部門第1区分

【発行日】平成29年4月27日(2017.4.27)

【公表番号】特表2016-519575(P2016-519575A)

【公表日】平成28年7月7日(2016.7.7)

【年通号数】公開・登録公報2016-040

【出願番号】特願2016-506776(P2016-506776)

【国際特許分類】

C 1 2 N	15/09	(2006.01)
C 4 0 B	40/02	(2006.01)
C 0 7 K	19/00	(2006.01)
C 1 2 Q	1/02	(2006.01)
C 1 2 Q	1/68	(2006.01)
C 1 2 N	1/15	(2006.01)
C 1 2 N	1/19	(2006.01)
C 1 2 N	1/21	(2006.01)
C 1 2 N	5/10	(2006.01)
G 0 1 N	21/64	(2006.01)

【F I】

C 1 2 N	15/00	Z N A A
C 4 0 B	40/02	
C 0 7 K	19/00	
C 1 2 Q	1/02	
C 1 2 Q	1/68	A
C 1 2 N	1/15	
C 1 2 N	1/19	
C 1 2 N	1/21	
C 1 2 N	5/10	
G 0 1 N	21/64	F

【誤訳訂正書】

【提出日】平成29年3月16日(2017.3.16)

【誤訳訂正1】

【訂正対象書類名】特許請求の範囲

【訂正対象項目名】請求項3

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【請求項3】

前記連結ペプチドは、ユビキチン、ユビキチンの短縮体、ユビキチンの突然変異体およびユビキチン様タンパク質、2Aペプチドなどから選ばれ、好ましくはユビキチンで、最も好ましくはK(R)飽和突然変異のユビキチンであることを特徴とする請求項1に記載の遺伝構築物。

【誤訳訂正2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0009

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0009】

もう一つの好適な実施様態において、Bに5'から3'の順で目的のタンパク質のコード

配列および第一の標識タンパク質のコード配列が含まれる。

もう一つの好適な実施様態において、前記連結ペプチドは、ユビキチン、ユビキチンの短縮体、ユビキチンの突然変異体およびユビキチン様タンパク質、2 A ペプチドなどから選ばれ、好ましくはユビキチンで、最も好ましくはK(R)飽和突然変異のユビキチンである。

好適な実施様態において、前記第一の標識タンパク質および第二の標識タンパク質は蛍光タンパク質である。

好適な実施様態において、前記蛍光タンパク質はEGFPまたはRFPから選ばれ、好ましくは第一の標識タンパク質はEGFPで、第二の標識タンパク質はRFPである。

好適な実施様態において、前記EGFPはmEGFPで、前記RFPはmRFPである。

好適な実施様態において、前記蛍光タンパク質のC末端またはN末端に一つまたは複数のタグタンパク質、たとえばFlagまたはmycが融合している。

もう一つの好適な実施様態において、前記目的のタンパク質のコード配列は、ヒトゲノムライブリーhuman ORFeome V5.1における全部の遺伝子を含む。

【誤訳訂正3】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0011

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0011】

もう一つの好適な実施様態において、前記連結ペプチドは、ユビキチン、ユビキチンの突然変異体およびユビキチン様タンパク質、2 A ペプチドなどから選ばれ、好ましくはユビキチンで、最も好ましくはK(R)突然変異のユビキチンである。

もう一つの好適な実施様態において、前記第一の標識タンパク質および第二の標識タンパク質は蛍光タンパク質である。

もう一つの好適な実施様態において、前記蛍光タンパク質はEGFPまたはRFPから選ばれ、好ましくは第一の標識タンパク質はEGFPで、第二の標識タンパク質はRFPである。

もう一つの好適な実施様態において、前記EGFPはmEGFPで、前記RFPはmRFPである。

もう一つの好適な実施様態において、前記蛍光タンパク質のC末端またはN末端に一つまたは複数のタグタンパク質、たとえばFlagまたはmycが融合している。

もう一つの好適な実施様態において、前記目的のタンパク質は、ヒト細胞全ゲノムライブリーhuman ORFeome V5.1における読み替によってコードされる全部のタンパク質を含む。

【誤訳訂正4】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0024

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0024】

本発明の掲示および既存技術に基づき、本発明では様々な連結ペプチドが利用でき、前記連結ペプチドが細胞内で切断されることによって分離した2種類の標識タンパク質となればよいことは、当業者に理解される。たとえば、具体的な実施様態において、前記連結ペプチドは、ユビキチン(Ub)、ユビキチンの突然変異体およびユビキチン様タンパク質、2 A ペプチドなどから選ばれ、好ましくはユビキチンで、最も好ましくはK(R)突然変異のユビキチンである。K(R)突然変異のユビキチンは、有效地に切断すると同時に自身がユビキチン化の部位にならないことが保証されるため、目的のタンパク質の分解特性に影響を与えない。